產業安全研究所研究報告

RESEARCH REPORT OF

THE RESEARCH INSTITUTE OF INDUSTRIAL SAFETY

RR-20-3

森 崎 繁

労働省産業安全研究所 MINISTRY OF LABOUR THE RESEARCH INSTITUTE OF INDUSTRIAL SAFETY

照射ポリエチレンの燃焼性に関する研究(第1報)*

-軟化及び示差熱重量分析について-

森 崎 繁**

Some Studies on Combustion of Irradiated Polyethylene

by S. MORISAKI*

Vicat softening point determination, differential thermal analyses and thermogravimetries were carried out for the purpose of investigating the thermal stability of polyethylenes irradiated with electron beams up to 100 Mrad. The softening temperatures for the irradiated low density polyethylenes much more increased with increase of radiation dose than those for the irradiated high density polyethylenes. From the results of thermogravimetry, the irradiated polyethylenes decompose in three stages in air but in one stage in a nitrogen atmosphere. Those irradiated polyethylenes decompose easily in nitrogen as it has also been shown by the calculation for activation energies, and begin to decompose at relatively low temperature in air with increasing radiation dose. The irradiated polyethylenes, however, are less combustible than the unirradiated polyethylenes, since the initial temperature for the second stage degradation, which probably shows an ignition point, and the residue after the degradation increase with increase of radiation dose. In addition, the differential thermal analysis was also carried out to investigate the mechanism of thermal decomposition of the irradiated polyethylenes.

* 同趣旨のものが"Thermochimica ACTA"で印刷中である. * 化学研究部 Research Division of Chemical Engineering

1. 緒 言

プラスチック材料は、工場、建設現場などにおいて、 ケーブル、シートなどとして広範囲に使用されている が、プラスチックがいったん燃焼すると有害なガスを 発生したりして、しばしば重大な災害の発生原因とな っている。また、プラスチックは、建設現場の潜函内 や高圧酸素治療室など高気圧環境下または酸素過剰雰 囲気中のような、火災が発生する危険性が大きい場所 においても使用されており、プラスチックの使用に伴 う災害の防止について大きな関心が持たれている。

このようなプラスチックの燃焼性を軽減することを 目的として,近年難燃性のプラスチックの研究開発が 盛んに行なわれており,そのうち目新しいもので,最 近工業製品として市場に出回わっているものに照射ポ リエチレンがある。

電子線などの放射線を照射して架橋させたポリエチ レン,いわゆる照射ポリエチレンは,その耐熱性,電 気的性質,機械的性質などが改善されることに基づき, 最近従来のものにかわって,ケーブル,シート,フィ ルムなどとして,一般に使用され始めている。このよ うな照射ポリエチレンは,前記のような危険な場所に おいても使用されようとしているが,その燃焼性に関 するデータはあまり見あたらない。したがって,火災 等の災害防止の観点から照射ポリエチレンの発火,燃 焼等の危険性をあらかじめ把握しておくことは意義の あることと思われる。

この報告は,照射ポリエチレンの燃焼に関する研究 の一環として,常圧における照射ポリエチレンの軟化 および示差熱重量分析について研究を行なったもので ある。

通常のポリエチレンの熱天秤を用いた示差熱重量分 析についての研究報告¹⁾ は数多くあるが,照射ポリエ チレンの同様な研究は少ししか行なわれていない。ポ リエチレンを電子線や7線などの放射線で照射したと きに生ずる主な効果としては,架橋の生成,不飽和結 合の増加,結晶の破壊,酸素存在下における表面酸化 などであるが,このような分子構造上の物理的,化学 的変化が,軟化や熱分解などに大きな影響を与えるも のと考えられる。Wall等²⁾ は,7線で照射した高密 度ポリエチレンと,未照射のポリメチレンとの熱分解 の状態を比較し,架橋が熱分解の割合にほとんど影響

RIIS-RR-20-3

を与えないことを結論している。また, Igarashi 等³⁾ は,高密度ポリエチレンを 7線で 55 Mrad まで照射 して,窒素中および空気中で熱重量分析を行なった結 果,両雰囲気中とも照射ポリエチレンが未照射のもの より分解しやすいことを報告している。しかし,照射 ポリエチレンの示差熱分析,燃焼等については言及さ れていない。

そこで筆者は、電子線により 100 Mrad まで照射し た低密度ポリエチレンおよび高密度ポリエチレンにつ いて、Vicat 軟化点測定装置および示差熱重量分析計 を用いて、それらの軟化の状態、ならびに空気中およ び窒素中における分解温度、発火温度、燃焼残渣、活 性化エネルギ等を調べ未照射のポリエチレンと照射し たポリエチレンの熱安定性の相違について比較検討を 行なった。

2. 実験方法

2.1 試 料

低密度ポリエチレンは、日本ユニカー(株)の DFDJ-5505 (密度0.92, 数平均分子量約10,000と報告されて いる.)を, 高密度ポリエチレンは、日本オレフィン (株)の Sholex 6050 (密度0.96, 数平均分子量10,000 と報告されている.)を用いた。いずれの試料も **Fig.** 1 に示すような鋳型用真空プレスを用いて低密度ポリ エチレンは 140℃ で約45分間,高密度ポリエチレンは 165℃ で約45分間融解し、その後冷水を通して冷却し、 厚さ 3mm の板状ポリエチレンとした。



- 2 -





所のヴァン・デ・グラーフ型電子 加速器を用いた。照射条件は、電 子線電流 10μA, 加速エネルギ, 1.5MeV, 電子線走査幅 32×3.5 cm, 線量率 1.9×10⁴rad/sec で あった。

2.3 照 射 方 法

成型されたポリエチ レン を 幅 2 cm,長さ 6 cm ぐらいに切断し, そのまま空気中(室温)で照射し た。

2.4 軟化温度の測定

軟化温度の測定にあたっては, **Fig.2** に示すような Vicat 軟化点 測定装置⁴⁾ を用いた。

Vicat 軟化点とは、プラスチッ

クの試料を一定の昇温速度で加熱していったと きに、1mm²の平らな円断面積を有する針が約 1kg の荷重により、試料の中に 1mm 侵入す る時の温度と定義されている。今回の実験にお いては、軟化点のみならず針入距離が 0.1mm から 1.0mm までにおけるそれぞれの軟化温度 も測定した。

この測定においては、熱溶媒としてシリコー ンオイルを使用し、温度上昇は自動制御して上 昇温速度を 50℃/hr とした。加熱の開始は冷 却管によりオイルの温度をいったん室温まで下 げてから行ない、軟化温度の読み取りはダイア ルゲージで行なった。試料にかかる荷重は、 1,020g であった。実験は各試料ごとに2回ず つ行ない、それぞれの針入距離における2回の 軟化温度の差を1℃以内とし、1℃以上の誤差 が生じた場合にはもう1回測定をしなおした。 軟化温度の決定は、2回の測定値の平均をとっ て行なった。なお試料の大きさは、幅約 5mm, 長さ約 10mm、厚さ 3mm のものとし、照射 されたものをそのまま用いた。

2.5 示差熱重量分析

示差熱重量分析には,理学電機製の示差熱重 量分析計 Thermoplex type 8021 を使用した。



- 4 -

Fig.3 にそのブロックダイアグラムを示めした。

この分析計では重量検出と示差熱検出とを同時に行 なうことができる。重量検出は化学天秤によって行な っており,重量変化が生じるとこの化学天秤の不平衡 状態を差動トランスにより電気的に検出し,重量検出 回路で増幅してバランシングモータを回転させる。そ れによりソレノイドコイルへ流す電流を変化させ,ソ レノイドコイルに発生する電磁力により天秤を平衡状 態に戻すようになっている。したがって,化学天秤を 平衡状態に戻すのに必要なソレノイドコイルに流れる 電流値を記録すれば,天秤の不平衡の方向およびその 大きさを知ることができる。示差熱検出は,試料と同 じ条件で加熱される不活性な基準物質と試料との温度 をそれぞれ熱電対で検出し,熱電対の起電力の差を直 流増幅器により増幅することによって行なっている。

試料および基準物質は、石英ガラス製のセル(内径 6mm,深さ19mm)の中に入れ、支持棒の上に置く。 熱電対は、セル下側の凸部に入れ、それぞれの温度を 検出する。また、試料および基準物質の入った2個の セルは、ベリリア製のホルダの内部に入れ、保護管(内 径 33mm,深さ290mm)をかぶせるようになってい る。この保護管の周囲から電気炉によって加熱を行な い、雰囲気ガスは、この保護管の内部を流通すること ができるようになっている。

本研究においては,示差熱検出用の熱電対には,白 金・白金ロジウムを、また温度検出にはクロメル・ア ルメルを使用した。また、測定に用いた昇温速度は 5.6℃/min であった。示差熱検出感度は, 空気中で 250 µV, 窒素中で 100 µV とし、フルスケールを 10 mV とした。重量検出感度は、いずれの場合も 50mg をフルスケールとした。基準物質にはアルミナを使用 し、各測定ごとに実験前約30分間るつぼで灼熱した。 試料は板状の照射ポリエチレンをプラスチック用カン ナで約 0.2mm の厚さに削り取り, 照射の際, 空気 に触れていた表面の部分を 0.5mm ほど切り落とし, 照射中に表面酸化した部分を除いた。その後このポリ エチレンフィルムを約 1mm 角に細かく切断し, 測定 試料とした。未照射のポリエチレンも同様に行なった。 これらの試料は、湿気の影響を考え、3日以上室内に 放置した。試料量はできるだけばらつきのないように 約 32mg とし、基準物質と混和せずにその上に置い た。また、この実験では、雰囲気流通法を採用し、空 気または窒素を、それぞれ 0.71/min の流量で保護管

の下部から送入し、同じく保護管の下部の2個所の出 ロから分解ガスを外部へ放出した。空気および窒素は 市販されているボンベ入りのもの(窒素は純度 99.98 %以上)をそのまま用いた。実験は2回以上再現性が 得られるまで行なった。

実験結果および考察

3.1 ゲル分率等の測定

熱的な分析に先立って,電子線照射により架橋させ たポリエチレンの架橋の状況を調べるため,ゲル分率 および数平均架橋度を調べた。

板状の照射ポリエチレンから作られた幅約 3mm, 厚さ約 0.2mm の各種のフィルムをステンレスバッグ (150メッシュ) に入れ,これらを酸化防止剤 di-βnaphtyl-p-phenylenediamine の0.1%キシレン溶液 (キシレンは1回蒸留した。)の中に浸漬し,約30時間 加熱沸とうさせ照射ポリエチレンの可溶成分を抽出し た。その後メタノールで約30分間沸とうさせたのち真 空乾燥し秤量した。

照射ポリエチレンの重量減少量から Table 1 及び Fig. 4 のとおりゲル分率が求められた。数平均分子あ たりの架橋単位の数を表わす数平均架橋度 τ は、ゾル 分率Sから次の2式を用いて計算することができる⁵. $\tau = \alpha u_1 R$

および

$S + \sqrt{S} = \beta/\alpha + 1/\alpha u_1 R$

ここで α および β は,架橋と主鎖切断に関する定数で あり、 β/α はその比率を表わす。またRは照射線量を、 u_1 は高分子の最初の数平均重合度を表わしている。 DFDJ-5505 と Sholex 6050 の β/α は、それぞれ 0.37と0.57となったが、このようにして求めた架橋度 の値は、同じく Table 1 にあげた。 この表から明ら かなように、低密度ポリエチレンのほうが高密度ポリ エチレンより架橋構造物が生成しやすいことがわかる。 また、厚い板状のポリエチレンを空気中で照射した場 合には、真空中など酸素のない状態で照射した場合と 比較して、ゲル分率などに大きな差はないと考えられ る⁶⁾。Igarashi 等⁷⁾は、0.027 mm の厚さのポリエチ レンフィルムを空気中でT線照射した場合のゲル分率 が0になることを認めている。

照射ポリエチ レンの燃焼性に関する研究

Table 1Variation of Crosslinking Index and Softening
Points of Irradiated Polyethylenes
照射ポリエチレンのゲル分率,数平均架橋度及び
軟化点の変化

Sample	Radiation dose, Mrad	Gel fraction, %	Crosslinking index	Softening point, °C
<u> </u>	Unirradiated			93.4
DFDJ-5505	2	0.5	0.6	96.5
	5	41.5	1.0	98.0
	10	58.8	1.5	98.6
	20	75.1	2.7	99.6
	50	83.1	4.9	101.8
	100	90.1	23.3	108.0
Sholex 6050	Unirradiated	·		127.7
	2	0.1	0.7	129.3
	5	9.3	0.8	129.8
	10	38.3	1.2	130.1
	20	52.1	1.6	129.9
	50	65.8	2.8	132.4
	100	80.4	14.7	133.2



Fig.4 Variation of gel fraction of polyethylene with radiation dose; (○) high density polyethylene, (●) low density polyethylene 照射ポリエチレンのゲル分率の変化

3.2 軟化温度の測定

照射された低密度ポリエチレンの軟化の状況は, Fig.5 に示めしてあるが,照射線量の増加に応じて各 針入距離における軟化温度が高密度ポリエチレンのそ れに比べてかな上昇しており,放射線の効果が明白に 出ている。殊に 50 Mrad, 100 Mrad のものの温度上 昇率が大きい。50 Mrad および 100 Mrad のものの軟 化温度の上昇は,低密度ポリエチレンの無定形領域に おいて三次元網状構造が著しく進んだ結果と考えられ る。未照射のポリエチレンと照射されたポリエチレン



Needl Penetration, mm

化曲線

Fig.5 Softening curves of irradiated low density polyethlenes by Vicat method; (○) unirradiated, (④) at 2 Mrad, (④) at 5 Mrad, (□) at 10 Mrad, (圖) at 20 Mrad, (△) at 50 Mrad, (▲) at 100 Mrad Vicat 法による照射低密度ポリエチレンの軟

の各針入距離に対する軟化温度の差は、だいたい一定 しており、たとえば、未照射のものと 100 Mrad のも のとの温度差は 15~19℃ である。

照射された高密度ポリエチレンの場合は, Fig.6 の ようになっており,低密度ポリエチレンと同様に線量 の増加に応じて軟化温度が高くなっているが,その影

- 5 ---

産業安全研究所研究報告



Fig. 6 Softening curves of irradiated high density polyethylenes by Vicat method; (○) unirradiated, (③) at 2 Mrad, (④) at 5 Mrad, (□) at 10 Mrad, (圖) at 20 Mrad, (△) at 50 Mrad, (▲) at 100 Mrad

Vicat 法による照射高密度ポリエチレンの軟 化曲線

響は顕著ではない。針入距離が 0.1mm から 1.0mm までの間において,軟化温度の範囲が 120°C から 130 °C ぐらいに限定されている。殊に 50 Mrad と 100 Mrad のものにおける針入距離が 0.1mm から 1.0 mm になるまでの温度差は,約 2°C となっており, 低密度ポリエチレンの場合における約 16°C に比べて 大きな差異が認められる。このことは,照射高密度ポ リエチレンにおいては,照射線量が大きくなるにつれ てエロンゲーション(延長)が生じにくくなることを 意味している。

針入距離が 1.0mm になる時の温度, すなわち軟化 点は, Table 1 及び Fig.7 に示すとおりである。低 密度ポリエチレンの場合, 未照射のものと 100 Mrad のものとの軟化点の差は 14.6℃ であるが, 一方高密



Fig.7 Variation of Vicat softening points of irradiated polyethylenes, (O) high density polyethylene, (●) low density polyethylene 照射ポリエチレンの軟化点の変化

RIIS-RR-20-3

度ポリエチレンの場合はその差が 5.5℃ となり,放射 線による効果の差がよく出ている。

軟化温度については、長鎖状の高分子では分子鎖の 屈曲性の小さいものほど軟化温度が高く耐熱性が大き いと考えられ、いいかえれば C-C 結合のまわりの内 部回転に対する障害が大きいものほど分子鎖は屈曲し にくく軟化温度が高いと考えられている⁸⁾。したがっ て、照射により三次元構造の生成が進むにつれ、C-C 結合のまわりの内部回転が生じにくくなり軟化温度が 高くなる。これが無定形領域の多い低密度ポリエチレ ンのほうが、結晶化度の大きい高密度ポリエチレンよ り電子線照射により軟化温度の上昇率が大きくなる理 由であろう。

3.3 空気中における熱重量分析 (TG)

照射ポリエチレンの空気中における酸化分解を調べ るため、空気流量 0.71/min の雰囲気中において熱重 量分析を行なった。Fig.8 に照射低密度ポリエチレン と未照射の低密度ポリエチレンを比較した TG 曲線 を Fig.9 に高密度ポリエチレンに対する TG 曲線 を示した。空気中においては未照射のポリエチレンも 照射されたポリエチレンも三段階にわたって酸化分解 が生じており、照射線量が増加するにつれてそれらの 分解開始温度、分解終了温度、分解ガス発生量などが 変化していることがわかる。これらのTG曲線からの 結果は、Table 2 にまとめられている。

空気中における第一次の分解は、ゆるやかな酸化分 解と考えられる。この分解過程において発生するガス の成分を調べるため、320℃ で5分間分解させたガス をガスクロマトグラフィーにより分析したところ、多 量の CO₂ が検出され、また 100 Mrad 照射した低密 度ポリエチレンと高密度ポリエチレンについて比較し てみると、後者のほうが前者より多量の CO₂ が発生 していることを確認した。

照射されたポリエチレンの空気中における酸化分解 の開始温度は,照射線量が増加するにつれて低温側に ずれており,照射ポリエチレンが比較的低温において 熱安定性のないことを表わしている。たとえば,100 Mrad 照射したポリエチレンの分解開始温度は,未照 射のものに比べ低密度ポリエチレンで 26℃,高密度 ポリエチレンで 30℃ の低下をみている。その様子は Fig. 10 に示めされている。一方,Fig.8 および Fig. 9 からも明らかなように 220℃ から 400℃ ぐらいま

~ 6 -



Table	2	Thermogravimetry	of	irradiated	polyethylenes	in	air
	空与	「中における昭射ポリ	エラ	トレンの執重	言骨分析		

Sample	Radiation dose, Mrad	Initi. temp. for 1st sta- ge decomp., °C	Initi. temp. for 2nd sta- ge decomp., ℃	Termi. temp. for decomp., °C	Weight loss, %		Pasidua 0/	
					first stage	third stage	Kesique, %	
	Unirradiated	254	373	554	2.9	3.9	0	
DFDJ-5505	5	242	. 375	557	12.9	10.0	0	
	10	239	376	559	16.2	12.0	0	
	20	232	390	563	19.4	13.2	0	
	50 .	230	400	559	17.6	12.4	0	
· ·	100	228	408	561	18.2	13.0	0	
	Unirradiated	261	393	537	5.6	5.0	0	
	5	259	388	545	5.2	5.1	0	
Sholex 6050	10	248	387	552	11.0	8.1	0	
	20	242	390	560	14.5	9.9	0	
	50	236	397	563	21.9	12.7	0	
	100	231	400	567	25, 8	15 1	0	

(注) 分解温度は、2回または3回実施したTG曲線から読み取り、それらの平均値をとった。

6 d + 10



Fig. 10 Initiation temperature for 1st stage degradation of irradiated dolyethylenes in air; (○) high density polyethylene, (●) low density polyethylene 空気中における照射ポリエチレンの分解開始 温度

での第一次分解において発生するガスの量も,線量の 増加に応じて増大している。たとえば,100 Mradの 照射線量のポリエチレンの第一次分解の発生ガス量は 未照射のものに比べて,低密度ポリエチレンで約6倍, 高密度ポリエチレンで約5倍となっており,燃焼が始 まる以前において多量の分解物が発生していることに なる。第一次分解における重量減少量の変化の傾向は,



Fig. 11 Variation of weight losses with radiation dose at each stage of degradation for irradiated low density polyethylenes in air; (O) first stage, (③) third stage 空気中の照射低密度ポリエチレンの各分解段 階における重量減少の変化



Fig. 12 Variation of weight losses with radiation dose at each stage of degradation for irradiated high density polyethylenes in air; (〇) first stage, (●) third stage 空気中の照射高密度ポリエチレンの各分解段 階における重量減少の変化

Fig. 11 および Fig. 12 のとおりであるが, 照射高密 度ポリエチレンの場合は,線量の増加に応じて増大し ているのに対して, 照射低密度ポリエチレンの場合に は, 20 Mrad 付近で極大値をとる傾向にある。

以上のように初期の段階において照射ポリエチレン が熱分解しやすい理由として,架橋によって生成した 三級炭素原子の増加とビニレン不飽和結合の存在によ るものと考えられる⁹⁾。 照射線量の増加に伴う酸化分 解の増加が 20 Mrad 以上照射した低密度ポリエチレ ンで見られないのは,照射中に側鎖が破壊されている ことに起因していると思われる。

第二次の分解が開始する温度は、おそらく発火温度 に対応すると思われるが、Fig.13 に示めすように低 密度ポリエチレンの場合には明らかに線量が増加する につれて高温側にずれており、発火しにくくなってい ると思われる。一方、照射高密度ポリエチレンの場合 は、反対に20Mrad ぐらいまではかえって未照射のも のより低くなる傾向を示し、50Mrad ぐらい以上の線 量になって未照射のものより発火しにくくなっている。





また,第二次分解の開始温度は,20 Mrad ぐらいま では高密度ポリエチレンのほうが低密度ポリエチレン より高く,それ以上の線量になると反対に低密度ポリ エチレンのほうが高くなって発火しにくくなっている と考えられる。

第二次分解の開始から第三次の分解が始まる前まで の温度範囲、すなわち、燃焼の温度範囲は、低密度ポ リエチレンで370~500℃,高密度ポリエチレンで390 ~500℃ であり、その燃焼の状況は、Fig.8 と Fig.9 からわかるように未照射のものと照射されたものとで 相異なった様子を示している。すなわち未照射のポリ エチレンでは、はっきりと二つのピークを有していて、 燃焼過程において二つの異なった酸化分解の仕方を表 わしているのに対して, 20 Mrad のものではピークの 形が崩れており、100 Mrad のものになると一つのゆ るやかなピークになっていて定常的な燃焼形態を表わ している。一方, 発火温度から 380~430℃ ぐらいま での初期の燃焼範囲において,未照射のポリエチレン が照射されたポリエチレンより重量減少率が大きく、 いいかえれば未照射のポリエチレンのほうがより激し く燃焼することが推定できる。

第二次分解が終了する温度は,窒素中での熱分解が 終了する温度,500℃ にほぼ等しくなっており,空気 中で照射ポリエチレンを熱分解させたときには,500℃ 以上になってもなお酸化分解を起こす焼燃残渣がある。 この残渣が分解する第三次分解温度は,いずれの場合 も 480~500℃ であり,また第三次分解の終了温度は,





(○) high density polyehtylene, (●) low density polyethylene
空気中における照射ポリエチレンの分解終了
温度

この残渣の量にも関連して、低密度ポリエチレンの50 Mrad と 100 Mrad のものは別とすると、 Fig. 14 の とおり照射線量の増加に応じて分解終了温度が高く なっており、炭化状になったものが 550~570℃ 付 近までくすぶって分解していることになる。第二次 分解後の残渣の量は, Table 2, Fig. 11, Fig. 12 から もわかるように照射線量が多いポリエチレンほど多く なる傾向を示しており、第三次の分解における分解ガ スが多くなっている。第三次の分解は燃焼ではなくて 多分炭状の炭化物が除々に酸化分解しているものと思 われる。燃焼終了後の残渣の量が多いことは、燃焼の 継続が困難なことを意味しており、いいかえれば、自 己消炎性をもっていると考えてよい。したがって、照 射ポリエチレンについて, 高密度ポリエチレンの場合 は、線量が多いほど、また低密度ポリエチ レンでは 20 Mrad 以上で大きな自己消炎性をもっていることに なる。

以上の空気中における TG の結果からいえること は、第一次の分解においては、いずれの照射ポリエチ レンも未照射のものより分解しやすいが、発火燃焼の 面からは高密度ポリエチレンの場合には 50 Mrad ぐ らい以上の照射線量のもので大きな難燃性の傾向を示 し、また低密度ポリエチレンの場合には 20 Mrad ぐ らい以上照射したものがより難燃化されることが期待 される。

- 9 -

- 10 ----

3.4 空気中における示差熱分析 (DTA)

空気中における照射ポリエチレンの熱酸化分解の DTA曲線は, Fig. 15 および Fig. 16 にあげてある。 TG曲線の3段階の分解に応じて三個所に発熱ピーク がある。すなわち,第1の発熱は分解する直前の酸化 によるもの,第2の発熱は多分発火によるもの第3の 発熱は燃焼残渣の酸化分解によるものであると考えら れる。



Fig. 15 DTA curves of irradiated low density polyethylenes in air. 空気中における照射低密度ポリエチレンの DTA曲線



Fig. 16 DTA curves of irradiated high density polyethylenes in air. 空気中における照射高密度ポリエチレンの DTA曲線

これらの発熱曲線の傾向としては、第1番目の発熱 ピークは照射線量の増加につれて低温側にずれており、 第2番目の発熱ピークは反対に高温側に、また第3番 目の発熱ピークは低温測にずれている。これらのこと はTGの結果に一致している。

RIIS-RR-20-3

3.5 窒素中における TG

低密度ポリエチレンおよび高密度ポリエチレンにつ いて、未照射のもの、照射線量が 20 Mrad および 100 Mrad のものの単位時間あたりの重量減少量 (%) と温度との関係をFig. 17 と Fig. 18 に示めされてい る。これらからの図から明らかなように、いずれの分 解も第1段階で完了しており、低密度ポリエチレンの 場合は、分解開始温度が Table 3 のとおり未照射の もので 396°C, 20 Mrad のもので 390°C, 100 Mrad のもので 385°C と線量の増加につれて低温測にずれ ている。また、465°C ぐらいまでは、一定温度におけ る重量減少率も線量の大きいものほど高くなっており、 照射ポリエチレンが窒素中では未照射ポリエチレンよ り分解しやすいことを意味している。475°C 付近で重 量減少率はいずれの試料でも最大となっており、未照



Fig. 17 TG curves of irradiated low density polyethylenes in a nitrogen atmosphere: (○) unirradiated; (●) at 20 Mrad; (△) at 100 Mrad.

窒素中における照射低密度ポリエチレンの TG 曲線





射のもので 18.7%/min, 20 Mrad のもので 18.0% /min, 100 Mrad のもので 16.0%/min となっている。 高密度ポリエチレンの場合も同様なことが認められ, 分解開始温度がそれぞれ 428°C, 419°C, 410°C と低温 側に移行しているが,低密度ポリエチレンよりはるか に分解しにくいことがいえる。一定温度における重量 減少率の傾向は,低密度ポリエチレンの場合とほぼ同 じであるが,最大の重量減少率およびその時の温度は いずれも高くなっており,未照射のもので22.5%/min, 480°C, 20 Mrad のもので 20.1%/min, 477°C, 100 Mrad のもので 19.8%/min, 475°C となっている。 しかし,いずれの場合も分解の終了温度は約 500°C と なっている。このような結果から照射されたポリエチ レンは.分解開始温度が未照射のポリエチレンに比べ て低いこと,重量減少率が大きいことおよび最大の重 量減少率を示す温度が低いことから未照射のものより 窒素中では分解しやすいことがわかる。

本研究の熱分解に使用したポリエチレンの試料は, 照射中に空気に触れていた表面を切り取ったものであ るから,照射により生成したカルボニル基などの影響 は少ないものと思われるが,ポリエチレンを真空中で 照射した場合にでもカルボニル基が生成していること は,Schmacher¹⁰)によって報告されている。窒素中 における熱分解に際しては,架橋および主鎖切断によ って生成した三級炭素原子およびビニレン不飽和結合 の増加,ならびにポリエチレンに溶存していた酸素に より生成したカルボニル基または過酸化物の存在によ り,照射ポリエチレンが未照射のポリエチレンより分 解しやすくなるものと考えられる。

3.6 窒素中における熱分解の活性化エネル ギの測定

窒素中における熱分解の活性化エネルギは, TG曲 線から Freeman と Carroll の式¹¹⁾を用いて計算した。

Sample	Radiation dose, Mrad	Decomp. temp., . °C	Activation energy, kcal/mole	Residue, %
DFDJ-5505	Unirradiated	396~496	84	<2
	20	390~494	69	
	100	385~500	64	//
Sholex 6050	Unirradiated	427~499	125	
	20	420~497	96	//
	100	410~496	88	. //

Table 3 Thermogravimetry of Irradiated Polyethylenes in Nitrogen Atmosphere 窒素中における照射ポリエチレンの熱重量分析

- 11 -

彼らは Arrhenius の式. $k=Ze^{-E/RT}$ (k: 反応速 度定数, Z: 頻度因子, E: 活性化エネルギ, R: 気体 定数, T: 絶対温度) およびある反応物質 A の消失割 合を表わす式, $-dX/dT=kX^{x}$ (X: 反応物質 A の量, x: 反応次数) から

 $\Delta \log (d\omega/dt) / \Delta \log W_r = x - E/2.3R \times \Delta(1/T) / \Delta \log W_r$ を導き出した。ここに $d\omega/dt$ は重量変化率, W_r は温 度Tにおける反応物質の重量を表わしている。

この式から $\Delta(1/T)/\Delta \log W_r$ に対して $\Delta \log (dw/dt)$ / $\Delta \log W_r$ をプロットして直線が得られれば,切片が 反応次数 x を示めし,その勾配 -E/2.3R から活性化 エネルギEが求められる。

この計算にあたって試料の重量変化率は, TG曲線 の一点から左右に2分の間隔のある位置をとり, その 位置から垂直に TG 曲線に線を引き, 1分あたりの 重量減少量を求めた。このようにしてプロットして 得た照射ポリエチレンに対する直線は, Fig. 19 及び Fig. 20 のようになり, 反応次数はいずれの場合も約 1である。これらの Freeman のプロットから求めた 活性化エネルギの値は, Table 3 に示した。

窒素中における熱分解の活性化エネルギの値は、低 密度ポリエチレンも高密度ポリエチレンも照射線量の 増加に応じて減少する傾向にあり、この結果からも照



$$\frac{\Delta(1/T)}{\Delta \log Wr} \times 10^3$$
, °K⁻¹

Fig. 19 Freeman's plots for thermal decomposition of irradiated low density polyethylenes in nitrogen; (○) unirradiated, (④) at 20 Mrad, (△) at 100 Mrad. 窒素中における照射低密度ポリエチレンのフ リーマンプロット



RIIS-RR-20-3



射ポリエチレンは窒素中で分解しやすいことがいえる。 また,照射低密度ポリエチレンと照射高密度ポリエチ レンとを比べると前者のほうがかなり後者より分解し やすいことがわかる。

未照射の高密度ポリエチレンの活性化エネルギの値、 125 kcal/mole は、Igarashi ら¹²⁾が低圧法によってつ くられたポリエチレン (Hizex 7000) について同じ手 法で求めた値、73.6 kcal/mole に比べて相当大きなも のになっている。この原因は、試料セルの形状、昇温 速度などの相異に基づいており、活性化エネルギの値 は、これらの要因によって大きく支配されることが考 えられる。

3.7 窒素中における DTA

Fig. 21 および Fig. 22 は、窒素中におけるTG曲 線を同時に得られた照射低密度ポリエチレンと照射高 密度ポリエチレンの未照射のものと比較したDTA曲 線を示めしている。すべてのポリエチレンのDTA曲 線は発熱ピークと吸熱ピークからなっているが、照射 されたポリエチレンについては、線量が増加するにつ れて発熱の初まる温度が高温側にずれていることおよ び発熱ピーク面積に比例すると考えられる発熱エネル

- 12 -



Fig.21 Thermograms of irradiated low density polyethylenes in nitrogen 窒素中における照射低密度ポリエチレンの DTA曲線



Fig.22 Thermograms of irradiated high density polyethylenes in nitrogen 窒素中における照射高密度ポリエチレンの DTA曲線

ギが小さくなっていることが注目される。熱分解の直 前に発熱が生じる理由は,分解の前に分子の再配列が 起きるためであると考えられる。したがって,照射ポ リエチレンの架橋度が増加するにつれ,すなわち三次 元網状構造が進むにつれ分子の再配列が困難になり, その結果,発熱エネルギと照射線量の増加に応じて減 少していくものと考えられる。

DTA曲線の発熱ピークの温度から分解が開始する とすれば,照射線量が増加するにつれて分解開始温度 が高くなるはずである。しかし,前記したように, TG曲線から求められた分解開始温度は,照射線量の 増加に応じて低くなっている。すなわち,DTA曲 線の発熱ピークにおける温度において,TG曲線上で はすでに重量減少が認められる。たとえば 100 Mrad 照射した低密度ポリエチレンでは、発熱ピーク温度で 約5%が分解しており、同じく高密度ポリエチレンで は約2%の重量減少が生じている。この原因は、32 mg といった比較的多量の試料量をDTAに使用した ため、初期のゆるやかな分解において吸熱ピークが検 出できなかったことによるものと思われる。

DTA曲線の吸熱ピークの温度は,TG曲線におけ る最大の重量減少を示めす温度に対応しており,また 吸熱ピークが照射線量の増加に応じて低温側にずれて いるが,これらの結果はTGの結果と一臨している。

4. 結 語

照射ポリエチレンの熱安定性を調べるため,軟化温 度の測定と示差熱重量分析を行なったが,その結果を まとめてみると次のとおりである。

- (1) 照射ポリエチレンは,照射線量の増加ととも に軟化しにくくなるが,照射低密度ポリエチレ ンの方が照射高密度ポリエチレンより軟化温度 の上昇率が大きく,たとえば軟化点についてみ ると,100Mrad 照射した低密度ポリエチレン の軟化点の上昇は,未照射のものに比べて14.6 ℃,一方,高密度ポリエチのそれは5.5℃となっている。
- (2) 未照射のポリエチレンおよび照射されたポリ エチレンともに空気中では三段階で熱酸化分解 を起こすが、窒素中では1段階で分解を終了す る。
- (3) 空気中および窒素中とも照射ポリエチレンの 分解開始温度は、照射線量の増加とともに低く なり、また空気中における第一次分解の分解ガ スの発生量も未照射のものよりはるかに多くな っている。
- (4) 発火点と推定される空気中における第二次の 分解開始温度は低密度ポリエチレンの場合は数 量の増加に応じて高くなる傾向に入る。
- (5) 未照射のポリエチレンの燃焼(第二次分解) は、二つの異なった酸化分解過程によって進行 しているのに対して、100Mrad ほど照射した ポリエチレンは、一定の酸化過程によって分解 する傾向にある。
- (6) 第二次分解の終了後の残渣は,照射ポリエチ レンのほうがはるかに多くなっており,照射ポ

- 14 --

リエチレンが難燃化されていると考えられる。

これからの結果からみて,照射ポリエチレンは,軟 化および燃焼性の点からはより安全なものになってい ると考えられるが,230~240℃ といった比較的低温 において分解が始まっていることからみて熱劣化が生 じやすく,また多量の分解ガスが発生することから熱 的に不安定な面も持っている。しかし,現段階におい ては,発火温度の正確な測定,第一次分解の発生ガス の分析,発火燃焼エネルギの測定,燃焼残渣の分析等 燃焼機構に関連して幾多の問題が残っており,また酸 素過剰雰囲気中もしくは高気圧下における熱分解につ いても未知であるので,これらの問題について今後の 研究を進めていく必要があろう。

(謝辞)

本研究にあたってポリエチレンの電子線照射を引き 受けてくださった東京都立アイソトープ総合研究所の 方々,ポリエチレンの試料を提供してくださった日本 オレフィン(株)および日本ユニカー(株)ならびに本研 究について終始ご支援くださった当研究所員の各位殊 に燃焼研究グループの方々に謝意を表します。

参考文献

1) たとえば H.H. Jellinek, J. Polymer Sci., 4,

RIIS-RR-20-3

13 (1949),

D.A. Anderson and E.S. Freeman, J. Polymer Sci., 54, 253 (1961),

S.Igarashi and H.Kambe, Bull. Chem. Soc. Japan, 37, 176 (1964)

- L.A. Wall, S.L. Madorsky, D.W. Brown, S. Straus and R. Simha, J. Am. Chem. Soc., 76, 3430 (1954)
- S. Igarashi, I. Mita and H. Kambe, J. Appl. Polymer Sci., 8, 1455 (1964)
- ASTM Designation; D 1525-65 T, Tentative Method of Test for Vicat Softening Point of Plastics
- A. Charlesby, Atomic Radiation and Polymers, Pergamon Press, London, 1960, pp. 137, 172
- P. Alexander and D. Toms, J. Polymer Sci., 22, 343 (1956)
- 7) S.Igarashi, I.Mita and H.Kambe, ibid
- 8) 神戸博太郎:高分子, 17, 650 (1968)
- 9) R.M.Black and A.Charlesby, Int. J.Radiation and Isotopes, 7, 134 (1959)
- 10) K. Schmacher, Koll. Zeits., 157(1), 16(1958)
- 11) E.S. Freeman and B. Carroll, J. Phys. Chem., 62, 394 (1958)
- 12) S.Igarashi and H.Kambe, ibid

産業安全研究所研究報告 RIIS-RR-20-3	
昭和 47 年 2 月 10 日 発行	
発行所 労働省産業安全研究所	
東京都港区之5 J 日35番1 号 電 話 45 3─8 4 4 1 (代)	
印刷所新日本印刷株式会社	
郵便番号 108	
· · · · ·	

UDC 662·612:678·742照射ポリエチレンの燃焼性に関する研究(第1報)森 崎 繁

産業安全研究所研究報告 RIIS-RR-20-3, 1 (1972)

照射低密度ポリエチレンの軟化温度は,照射線量の増加にともない照射高密度ポリエチ レンのそれよりはるかに増加した。熱重量分析の結果からは,照射ポリエチレンは,空気 中においては三段階で分解するが,窒素中では一段階で分解を終了する。これらの照射ポ リエチレンは,活性化エネルギーの計算からも認められるように,窒素中では容易に分解 し,また空気中においては,比較的低温において分解を開始する。しかしながら,照射ポ リエチレンは,未照射のポリエチレンより難燃性になっている。なぜならば,発火温度と 考えられる空気中における第二次の分解開始温度および第二次分解終了後の残渣が,照射 線量の増加につれて増大するからである。加うるに,照射ポリエチレンの熱分解の機構を 調べるため,示差熱分析もあわせて実施した。

(図22,表3,参12)

UDC 662-612:678-742 Some Studies on Compusition of Industrial Safety S. MORISAKI Research Report of the Research Institute of Industrial Safety

RIIS-RR-20-3 (1972)

The softening temperatures for the irradiated low density polyethylenes much more increased with increase of radiation dose than those for the irradiated high density polyethylenes. From the results of thermogravimetry, the irradiated polyethylenes decompose in three stages in air but in one stage in a nitrogen atmosphere. Those irradiated polyethylenes decompose easily in nitrogen as it has also been shown by the calculation for activation energies, and begin to decompose at relatively low temperature in air with increasing radiation dose. The irradiated polyethylenes, however, are less combustible than the unirradiated polyethylenes, since the initiation temperature for the second atage degradation, which probably shows an ignition point, and the residue after the degradation increase with increase of radiation dose. In addition, the differential thermal analysis was also carried out-to investigate the mechanism of thermal decomposition for the irradiated polyethylenes.

(22 Figures, 3 Tables, 12 Reperences)